

新潟大学『人文科学研究』総目次

人文科学研究第 115 輯,2004,08,

鈴木孝庸,イェール大学蔵の當道資料について一付『四宮殿傳記』翻刻一,1~20,

田口一郎,マッテオ・リッチの記憶術—『西國記法』訳注(一),21~60,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔補Ⅲ⑤〕～デカルトの独自の用法とその認識論～,左 1~24,

古賀豊,人文科学におけるコンピュータ利用の現状と課題,左 25~43,

人文科学研究第 114 輯,2002,02,

三井正孝,《場所》のニオイテ格—現代語の場合—,1~36,

高橋正平,Lancelot Andrewes とジェームズ一世—The Gowrie Conspiracy 説教と The Gunpowder Plot
説教を中心にして—,左 1~35,

平野幸彦,2つの顔を持つ物語—「タール博士とフェザー教授の療法」の読者について—,左 37~50,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔補Ⅲ④〕～デカルトの独自の用法とその認識論～,左 51~74,

三浦淳,第二外国語教育を壊滅から救い,新たな制度とイデオロギーを生み出すために,左 75~96,

人文科学研究第 113 輯,2003,12,

井山弘幸,コントの哲学—その構造と展望(Ⅰ)—,1~22,

荒生弘史・諏訪園秀吾・坂本勉,心的辞書における統語的側面—文の自然さ評定による日本語他動詞の格
選択特性の解析—,左 1~14,

高田晴夫,Etude contrastive de la construction du type *Nom Adjectif*(français)et celle du type
Adjectif Nom(japonais)(2),左 15~52,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔補Ⅲ③〕～デカルトの独自の用法とその認識論～,左 53~74,

人文科学研究第 112 輯,2003,08,

船城俊太郎,でさのよツイスト—<かかりむすび>の再生—,1~46,

児玉憲明,陳陽『樂書』研究(一)—「八佾舞於庭」章を中心に—,47~74,

桑原聡,アイヒェンドルフにおけるイギリス風景式庭園とエグゾティズム(下),75~98,

佐藤康行,東北タイ農村社会における市民社会形成の可能性—貯蓄組合とマスメディア,投票行動をめぐ
って—,左 1~26,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔補Ⅲ①〕～デカルトの独自の用法とその認識論～,左 27~54,

高田晴夫,Etude contrastive de la construction du type *Nom Adjectif*(français)et celle du type
Adjectif Nom(japonais)(1),左 55~102,

並木宏,ドイツ語教授法私論—文法の導入をどうするのか—,左 103~110,

人文科学研究第 111 輯,2003,03,

佐藤康行・内田健,山村における地域生活と家の変容—新潟県安塚町の事例—,1~36,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔補Ⅱ〕～デカルトのアリストテレス的用法とその認識論～,
左 1~22,

佐藤和代,夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ「意識の流れ」から「視点」へ一,左 23~47,

人文科学研究第 110 輯,2002,12,

城戸淳,カントにおける自己意識の問題—超越論的主観と統覚の総合的統一—,1~34,

鈴木孝庸,資料紹介『當道略記』,35~101,

嶋田洋徳・井上和哉・和田美佐子,項目反応理論を用いた異性不安尺度の項目分析,左 1~15,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔補 I〕～デカルトの用法とその認識論～,左 17~40,

高田晴夫,Etude contrastive de la construction du type *Nom de Nom*(français)et celle du type *Nom no Nom*(japonais)(2),左 41~82,

人文科学研究第 109 輯,2002,08,

荒生弘史・河邊隆寛・三浦佳世,Determinants Affecting Auditory Target Detection : An Exploration With Pure Tones and Pure-Tone Triads,左 1~13,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔V〕～デカルトの<âme>の諸能力について(その2),左 15~69,

高田晴夫,Etude contrastive de la construction du type *Nom de Nom* (Français)et celle du type *Nom no Nom*(japonais)(1),左 71~88,

細田あや子,「井戸の中の男」・「一角獣と男」・「日月の鼠」の図像伝承に関する一考察,左 89~121,

人文科学研究第 108 輯,2002,03,

船城俊太郎,出現した、百年前の地方文学の作品群—その経緯と、まずは詩文集『兵窓漫筆』・回覧雑誌『深山の花 臨時増刊』および『愛董遺稿』について—,1~38,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔IV〕～デカルトの<âme>の諸能力について(その1)～,左 1~42,

中沢敦夫,『アフナーシー・ニキーチンの三海渡航記』翻訳と註釈(3),左 43~65,

サヴェリエフ・イゴリ,20世紀初頭のロシア政府の対東アジア系移民政策について,左 67~98,

細田あや子,イエスの譬え図像考察:「大宴会」の譬え—オットー・ザリエル朝,ビザンティン写本を中心として—,左 99~133,

三浦淳,フローベールの逸話—または作家と結婚(下)—,左 135~155,

人文科学研究第 107 輯,2001,12,

城戸淳,現象と空間—カント超越論的感性論における窃取モデルの論理,1~28,

栗原聡,アイヒェンドルフにおけるイギリス風景式庭園とエグゾティズム(上),29~58,

斎藤陽一,永井愛における空間—戦後生活史劇三部作をめぐって—,59~74,

渡辺登,地方自治体における女性政策の可能性—市民参画の視点から—,左 1~24,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔III〕～デカルトの身体の感覚と身体の想像について(その2)～,左 25~56,

高田晴夫,Etude contrastive de mots construits désignant une 'action' en français et en japonais(3),左 57~72,

人文科学研究第 106 輯,2001,08,

栗原隆,風景論への架橋—中心と境、街と橋—,1~31

児玉憲明,経学における「楽」の位置,33~55

SATO, Yasuyuki and SRISAMAI, Siwaporn,Evaluation on Rajabhat Institute in Thailand—A Case Study of Rajabhat Institute Surin—,左 1~17

高田晴夫,Etude contrastive de mots construits désignant une ‘action’ en français et en japonais(2),
左 19~37

Jenny Holt,Creatures of Fantasy,The Creation of Romantic European Adolescent Idea,左 39~70

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔II〕～デカルトの身体の感覚と身体の想像について(その1)
～,左 71~95

人文科学研究第 105 輯,2001,03,

黒沢岑夫,ニキチェンコとその時代(12),1~48,

中沢敦夫,『アフナーシー・ニキーチンの三海渡航記』翻訳と注釈(2),左 1~18,

佐藤康行,Family Life in the Khmer Village in Thailand—Survey in No.1 of Kwashinarin Village in Kwashinarin District, Surin Province—,左 19~36,

サヴェリエフ・イゴリ,極東ロシア地域における東アジア移民対策の変容過程(1860~1884)—自由移住から移民統制への道程—,左 37~52,

人文科学研究第 104 輯,2000,12,

栗原隆,風景論のためのメモランダー—風景と触覚—,1~16,

荻美津夫,地下楽家の系譜とその活動—戸部(小部)・玉手・三宅・安倍氏と「非重代楽人」の場合—,17~40,

鈴木孝庸,口頭演説とその詞章—「道行」の扱い方をめぐって—,41~64,

村上吉男,シモーヌ・ヴァーユとデカルト〔1〕～学位論文『デカルトにおける科学と知覚』に読む認識論的問題の所在①～,左 1~29,

高田晴夫,Etude contrastive de mots construits désignant une ‘action’ en français et en japonais(1),
左 31~46,

人文科学研究第 103 輯,2000,08,

芳井研一,雪害救助の思想と運動,1~39,

中村潔,「伝統」の構築—バリにおける多元的医療体系,左 1~24,

中沢敦夫,『アフナーシー・ニキーチンの三海渡航記』翻訳と注釈(1),左 25~42,

村上吉男,デカルトにおける理性と感覚(5)～もう一つの<真理の探究>について①～左 43~89,

人文科学研究第 102 輯,200,03,

赤澤計眞,エドワード二世時代のプランタジネット王朝国家,1~14,

金山亮太,『ハード・タイムズ』における「融合」と「解体」,15~30,

玄幸子,『洪武正韻』韻図序論,31~52,

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン・逸見龍生訳,運動してやまぬ知、知としての運動—蝶に語った男,53
～76,

人文科学研究第 101 輯,1999,12,

錦仁,伝承資料集成 東北地方における小野小町伝承の分布と概要(下),1~35,

赤澤計眞,プランタジネット王朝国家のスコットランド統治政策,37~68,

山影隆,仮寓・定住・変移—ドロシー・ワーズワース「オルフォックスデン日記」「グラスミア日記」に
おける花鳥風月の世界—,69~95,

黒澤岑夫,ニキチェンコとその時代(11),97~124,

佐藤徹郎,Sorites パラドックスについて,左 1~16,

嶋田洋徳・佐藤健二,自己開示尺度の作成とその健康心理学的意義,左 17~34,

佐藤康行,A Consideration on Forming Community in Thai-Khmer Village—A Case Study of
Kwashinarin Muban 1 in Surin Province, Thailand—,左 35~63,

村上吉男,デカルトにおける理性と感覚(4),左 65~103,

人文科学研究第 100 輯,1999,8,

赤澤計眞,エドワード一世時代のイングランド封建国家,1~30,

錦仁,伝承資料集成 東北地方における小野小町伝承の分布と概要(上)—小野篁・良実・猿丸など関連の
伝承を含む—,31~61,

深澤助雄,証聖者マクシモスの神化論,63~102,

船城俊太郎,「了(ヲハンヌ)」考—<変体漢文>研究史にまでおよぶ—,103~128,

古賀豊,マルコフ連鎖モデルを用いた流行現象の検討—社会現象の数理的分析論(1)—,左 1~18,

サヴェリエフ・イゴリ,多民族社会における移住者の第二世代の教育—ウラジオストクの日本人小学校の
歴史をめぐって—1894年—1931年,左 19~44,

佐藤康行,Structure of Village and Logic of Islander(Shimanchu)in Yonaguni Island of Okinawa—
Through an Accept of Outsider in Island—,左 45~68,

高田晴夫,フランス語における「動詞+名詞」型合成語の複数形について,左 69~92,

高橋秀樹,ヘシオドスの叙事詩における賢者観念の比較文化論的特性と展開,左 93~110,

武井楨次・渡辺登・□□,「民工」の都市定着への促進・阻害要因に関する研究—上海市 F 区 M 鎮の事
例を通して,左 111~135,

人文科学研究第 99 輯,1999,03,

錦仁,伝承資料集成(小野小町伝承との観点から)—福島県南会津郡下郷町の「日光山縁起」関係文書の翻
刻と考察—,1~32,

關尾史郎,トゥルファン出土 高昌国税制関係文書の基礎的研究(九)—條記文書の古文書学的分析を中
心として—,33~58,

赤澤計眞,プランタジネット朝ヘンリー三世時代の貴族反乱,59~84,

桑原聡,沈黙する世界・呪縛された大地—『予感と現在』における自然と人工(下)—85~105,

高橋康浩,ラインホルド・ニーバーのアイロニーの概念,左 1~38,

村上吉男,デカルトにおける理性と感覚(3)~デカルトの真のねらいは何か~,左 39~64,

渡辺登・武井楨次・□□,中国における「出稼ぎ労働者」の都市定着に関する研究,左 65~88,

Alexander F.Prassol,Some Features of the Sentence-Final Particles in Japanese,左 89~106,

人文科学研究第 98 輯,1998,12,

赤澤計眞,プラントジネット王朝時代のイングランド封建国家,1~30,

黒澤岑夫,ニキチェンコとその時代(十),31~66,

桑原聡,沈黙する世界・呪縛された大地—『予感と現在』における自然と人工(中)—,67~91,

關尾史郎,トゥルフアン出土 高昌国税制関係文書の基礎的研究(八)—條記文書の古文書学分析を中心として—,93~117,

杉原名穂子,文化的再生産におけるジェンダーと階層,左 1~20,

福田一雄,日本語のマキシム・ヘッジとマキシム・ブースター—語用論的言語学の一視点—,左 21~42,

村上吉男,デカルトにおける理性と感覚(2)~<真理の探究>について(その1)~,左 43~66,

人文科学研究第 97 輯,1998,8

深澤助雄,「大審問官」伝説の思想史,1~57,

先田進,『豊饒の海』論(一)—「春の雪」における<禁忌の侵犯>—,59~80,

金山亮太,ディックさんの狂気は何を暴いているのか,81~98,

桑原聡,沈黙する世界・呪縛された大地—『予感と現在』における自然と人工(上)—,99~119,

Akio KIMURA,Faulkner's The Town:The Game of Pity,左 1~19,

人文科学研究第 96 輯,1998,03,

赤澤計眞,ドイツ初期中世におけるザクセン朝国家の成立過程,1~32,

嶋田洋徳,高校生における原因帰属スタイルの日韓比較,左 1~16,

三浦淳,フローベールの逸話—または作家と結婚(上),左 17~34,

村上吉男,デカルトにおける理性と感覚(1),左 35~65,

人文科学研究第 95 輯,1998,01,

玄幸子,「須大拏太子返變文」について,1~25,

山影隆,鳥の詩歌の変奏—ジョン・クレアとイギリス・ロマン派詩人—,27~55,

大野木哲,自然のなかの人間について—哲学の視点からの覚え書—,左 1~15,

児玉憲明,『律呂新書』研究—「声気之元」と「数」—,左 17~39,

村上吉男,なぜ感受性なのか(4),左 41~66,

並木宏,副文について,左 67~77,

三浦淳,マン兄弟の確執—1903~05年—(その8),左 79~93,

人文科学研究第 94 輯,1997,08,

佐藤康行,巻町角田浜の「家」に関する歴史社会学的研究(上),1~34,

広部俊也,黄表紙の人物類型—侠について—,35~58,

村上吉男,なぜ感受性なのか(3),左 1~24,

高田晴夫,現代フランス語の合成法の占める位置とその機能的役割,左 25~38,

高橋秀樹,史料としてのソロン詩篇—日本の研究動向と問題点の整理—,左 39~60,

中村隆志,落書きと楽書きのメディア論(その1),左 61~76,

三浦淳,マン兄弟の確執—1903~05年—(その7),左 77~100,

Caroline Ings, A self-Referencing Teaching Text on the Early Reformation in Germany and England,
左 101~136,

人文科学研究第 93 輯,1997,03,

山内民博,李朝後期在地士族家門伝来の所志類について,1~34,

黒澤岑夫,ニキチェンコとその時代(九),35~66,

赤澤計眞,ドイツ中世前期におけるザリエル朝権力の変動過程,67~96,

木村章男,『ジョヴァンニの部屋』と「黒人作家」 ボールドウィン,左 1~26,

村上吉男,なぜ感受性なのか(2),左 27~50,

高木裕,表象することと物語ること—ネルヴァルの『シルヴィ』の場合—,左 51~76,

並木宏,ドイツ語における時刻の表現について,左 77~84,

佐藤和代,夏目漱石における『白痴』からの三つの抜き書きについて—自由間接語法を中心に—,左 85~
108,

三浦淳,マン兄弟の確執—1903~05年—(その6),左 109~134,

人文科学研究第 92 輯,1996,12,

鈴木佳秀,祖型としてみた父アブラハム—ユダヤ教、キリスト教、イスラム教をめぐる比較宗教思想試論
(一)—,1~38,

佐藤康行,タイ農協の発展に関する一考察—サンパトーン農協とポンサイ農協とを比較して—,39~68,

玄幸子,『生経』語法割記,69~94,

山影隆,大江健三郎『新しい人よ目ざめよ』と『懐かしい年への手紙』におけるブレイクとダンテの引用
詩句とその用法,95~122,

山内志朗,ドゥンス・スコトゥスにおける意志と必然性,左 1~24,

鈴木光太郎,旧制新潟高等学校教授時代の黒田亮,左 25~48,

逸見龍生,『百科全書』第一巻ディドロ寄稿項目における『王立科学アカデミー概要および論文集』典拠,
左 49~70,

松井克浩,農業後継者集団の形成と展開(2)—新潟県柏崎町「いぶきの会」の事例—,左 71~98,

**Beate von der Osten, Von der eventuellen Notwendigkeit von Reformen im Fach Deutsch als
Fremdsprache an japanischen Universitäten—Teil2,**左 99~147,

人文科学研究第 91 輯,1996,08,

赤澤計眞,ヨーロッパ中世初期の王領と国家形態,1~78,

三浦淳,マン兄弟の確執—1903~05年—(その5),左 1~26,

村上吉男,なぜ感受性なのか(1),左 27~50,

人文科学研究第 90 輯,1996,03,

川崎隆司,プーシキンの歴史小説,1~28,

猪俣賢司,十一音節詩はどこへ行ったのか—フランス・ルネサンス詩学の文体論—,29~64,

赤澤計眞,西ヨーロッパ初期中世の地域権力形成,65~106,

中沢敦夫,「瘋癲行者」名称考,左 1~28,
有馬達郎,19 世紀末ウラル製鉄業の構造変化(3)—停滞論相対化の視点から—,左 29~60,
村上吉男,シモーヌ・ヴァーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開 [IV],左 61~87,

人文科学研究第 89 輯,1995,12,

深澤助雄,「コスモスを無みする愛」,1~35,
赤澤計眞,イングランド中世末期における新侵奪訴訟の特質と領主的土地所有,37~66,
天野みどり,後項焦点の「A が B だ」文,左 1~24,
有馬達郎,19 世紀末ウラル製鉄業の構造変化(2)—停滞論相対化の視点から—,左 25~44,
並木宏,不変化詞について,左 45~59,
松井克浩,農業後継者集団の形成と展開(1)—新潟県柿崎町「いぶきの会」の事例—,左 61~81,
佐藤信行,パウル・ツェラーンの詩集『無き者の薔薇』(詩群IV) —<口>と<希望のシボーレト>—,
左 83~104,

Kazuo FUKUDA, Theme/Rheme, Given/New and Japanese *Wa*, 左 105~128,

Akio KIMURA, A Necessary Death in Katherine Anne Porter's "Noon Wine", 左 129~150,

人文科学研究第 88 輯,1995,07,

黒澤岑夫,ニキチェンコとその時代—体制のなかの知識人—(八),1~30,
天野みどり,「が」による倒置指定文—「特におすすめなのがこれです」という文について—,左 1~22,
有馬達郎,19 世紀末ウラル製鉄業の構造変化(1)—停滞論相対化の視点から—,左 23~40,
村上吉男,シモーヌ・ヴァーユ研究における問題の所在,左 41~66,
並木宏,副詞について,左 67~76,
笹原恵,女性研究者のライフサイクルに関する一考察—就学と家族生活と—,左 77~96,
佐藤和代,漱石とジェイン・オースティン—自由間接語法をめぐって—,左 97~134,
三浦淳,マン兄弟の確執—1903~05 年—(その 4),左 135~156,
佐藤信行,パウル・ツェラーンの詩集『無き者の薔薇』(詩群 III) —<心>と<真実のツイタデレ>—,
左 157~170,

Ф. П р а с о л, О п ы т о п и с а н и я у с л о в н ы х ф о р м я п о н с к о г о
я з ы к а, 左 171~208,

人文科学研究第 87 輯,1995,03,

宮崎莊平,「女房日記」とは何か—その性格と本質—,1~22,
鈴木孝庸,資料紹介『琵琶平家物語』(上)(上越市立高田図書館蔵),23~132,
赤澤計眞,初期中世西ヨーロッパの国家と貴族権力,133~164,
三浦淳,マン兄弟の確執—1903~05 年—(その 3),左 1~24,
秋孝道,英語の小節の構造について,左 25~48,

人文科学研究第 86 輯,1994,12,

關尾史郎,トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(七)—條記文書の古文書学的分析を中心として—,1~26,

白石典之,モンゴル部族の自立と成長の契機—十～十二世紀の考古学資料を中心に—27～52,
先田進,三島由紀夫作「弱法師」における《盲目》の意義,53～76,
内山鉄二郎,「習作」としての『デイジー・ミラー』,77～102,
福沢榮司,鷗外と明治という時代,103～129,
佐藤智子,A Study of Fascicle 24,左 1～20,
木村章男,Shakespeare and Faulkner : Gods, Revenge, and Time,左 21～44,
村上吉男,シモーヌ・ヴァーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔Ⅲ〕,左 45～70,
並木宏,代名詞について,左 71～82,
高橋秀樹,Athenaion Politeia XIX.—Rhetrical techniques, political theory and traditions—,左 83～94,
中沢敦夫,『囚人ダニールの請願』の詩的技法について,左 95～120,
大河内康行,台詞の意味機能について—ワイルド, カワード, ピンター—,左 121～149,

人文科学研究第 85 輯,1994,09,

佐藤康行,北タイ農村における村落の形成過程に関する一考察—チェンマイ県サンパトーン郡マッカム
ルン区トンケーオ村の事例—,1～50,
赤澤計真,イギリス十三世紀における新侵奪訴訟—エドワード一世時代の土地所有と土地訴訟—,51～
82,
今井道兒,文化の概念について—ノート(五)—,83～114,
黒澤岑夫,ニキチェンコとその時代—体制のなかの知識人—(七),115～136,
Kazuo FUKUDA, On Thematicity and Topicity of Fronted Adverbials in English,左 1～28,
佐藤信行,パウル・ツェラーンの詩集『無き者の薔薇』(詩郡Ⅱ)—〈指〉と〈無言のディアローク〉—,
左 29～46,
高田晴夫,語形成法の〈言語位相〉と〈意味効果〉に関する若干の考察—合成語を中心に—,左 47～82,
村上吉男,シモーヌ・ヴァーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔Ⅱ〕,左 83～99,

人文科学研究第 84 輯,1993,12,

佐藤康行,北タイ農民における生産・生活様式の相違について—チェンマイ県サンパトーン郡マックムル
ン区トンケーオ村の事例—,1～44,
藍原清巳,修羅物における大鼓「頭組」の手組について,45～72,
宮崎莊平,漱石における越後・新潟の地域像—「金力と品性」の問題—,73～100,
關尾史郎,トゥルフアン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(六)—一條記文書の古文書学的分析を中心
として—,101～138,
赤澤計真,13 世紀のイギリスの土地訴訟—ランカシャーにおける「古王領地」問題—,139～166,
高田晴夫,内部冠詞選択に関するギョームの仮説について—アンケート調査をめぐって—,左 1～20,
Akio KIMURA, As I Lay Dying and The Hamlet : The characters and/or the Setting,左 21～48,
大石強比較構文と LF 認可左 49～69

人文科学研究第 83 輯,1993,07,

金山亮太,『クランフォード』における寄生の問題,1～20,
關尾史郎,トゥルフアン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(五)—一條記文書の古文書学的分析を中心

として一,21~70,

内山鉄二郎, *Come Back, Little Sheba*—「対比の方法」の特徴一,左 1~18,

秋孝道,節構造と移動現象について,左 19~34,

高木裕,詩の空間と<声>(II)—ネルヴェルの<語りかけ>の詩法一,左 35~70,

人文科学研究第 82 輯,1992,12,

児玉憲明,候気術に見える気の諸観念,1~30,

山影隆,ジョン・クレア『羊飼いの暦』—詩意識と詩的構造—,31~70,

赤澤計眞,イングランド中世土地法の史的展開,71~108,

深澤助雄,「精神的動物の國」と仕事,109~154,

佐藤康行,北タイの—村落における世帯間農業共同の諸形態—ランブーン県メーター郡タカ区タカ村の事例—,155~182,

清水登,中国語における時間表現の二次元性について,左 1~24,

大石強,項構造と語彙規則,左 25~36,

高田晴夫,合成語理論に関する若干の史的考察,左 37~56,

人文科学研究第 81 輯,1992,07,

先田進,三島由紀夫の《視見》の論理—『豊饒の海』第三卷「暁の寺」論—,1~24,

關尾史郎,トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(四)—條記文書の古文書学的分析を中心として—,25~64,

今井道兒,文化の概念について—ノート(四)—,65~96,

深澤助雄,「神の不可思議なる無知」について,97~126,

佐藤康行,北タイ農村における村落構造に関する—考察—村落の政治的支配をめぐって—,127~159,

清水登,北京語第三声の調型変異と強意性の対応,左 1~20,

大河内康行,『真面目が大切』論—<ふまじめ>の追究—,左 21~48,

斉藤陽一,『犬を連れた奥さん』におけるドン・ファン伝説—神なき時代のドン・ファンについて—,左 49~60,

高田晴夫,シナプシ再考,左 61~86,

高木裕,詩の空間と<声>(I)—『瞑想詩集』から『ジョセフ・ドロルム』へ—,左 87~118,

山崎幸雄,擬態語再考,左 119~130,

大野木哲,自然と人間—哲学と科学の変遷についての—考察—,左 131~157,

人文科学研究第 80 輯,1992,01,

松本和良,機能主義と構造主義(四)—パーソンズによるウェーバー理論の把握について—,1~34,

佐藤康行,北タイ農村の変容に関する生活史的研究,35~68,

児玉憲明,律呂新書研究序説—朱熹の書簡を資料に成立の経緯を概観する—,69~108,

金山亮太,『クリスマス・キャロル』の経済学,109~130,

山影隆,ジョン・クレアの初期詩—召命と詩的構造—,131~158,

武井楨次・木村邦博,高校生の学歴アスピレーションと階層—「文化的再生産論」にもとづく考察—,左 1~32,

天野みどり,二つの補充成分間の意味的關係づけ—経験的間接関与構文,特に複主格文を中心として,左
33~58,

清水登,東北アジア地域発展への展望,左 59~72,

赤澤計眞,*The Historical Forms of the Medieval Documents*,左 73~120,

向井照彦,*John Muir* と *Sierra Nevada* の自然,左 121~144,

高田晴夫,シナプシと変異形間の選択に関するアンケート,左 145~170,

人文科学研究第 79 輯,1991,08,

今井道兒,文化の概念について—ノート(三)—,1~30,

松本和良,機能主義と構造主義(三)—パーソンズによるデュルケム理論の把握について—,31~64,

赤澤計眞,西ヨーロッパ産業構造の変動,65~108,

高木裕,ヴェルレーヌの<風景>Ⅱ,左 1~32,

高田晴夫,語形成手段の選択に課される制約について—<所有>を表す前置詞 *à* を含む 2 つの表現形式
をめぐって—,左 33~58,

G. Kroj・長塚康弘(訳),西ドイツにおける交通教育の現状について,左 59~88,

人文科学研究第 78 輯,1990,12,

内山鉄二郎,『子供の時間』試論—レスビアンのドラマ—,1~20,

金山亮太,時計仕掛けのリチャード・フェヴェレル,21~48,

山影隆,ミューズ・眼・迷宮—ジェイムズ・トムソン『四季』論—,49~79,

松本和良,機能主義と構造主義(二)—ルーマンの自己準拠的システムについて—,81~109,

渡部和雄,最極大秘密法界体,111~147,

關尾史郎,トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(三)—一條記文書の古文書学的分析を中心
として—,149~177,

大河内康行,『アマデウス』論—意匠としての神—,左 1~29,

秋孝道,英語における前置詞残留に関する覚書,左 31~58,

高木裕,ヴェルレーヌの<風景>,左 59~84,

高田晴夫,フランス語における語形成手段の選択の原理,左 85~100,

人文科学研究第 77 輯,1990,07,

児玉憲明,宋書律志訳注稿(二),1~23,

今井道兒,文化の概念について—ノート(二)—,25~56,

松本和良,機能主義と構造主義(一)—パーソンズの機能主義について—,57~83,

渡部和雄,翻訳宗教,85~117,

向井照彦,選挙日説教における *wilderness—Thomas Shepard* の *Eye-salve,...* を中心に—,左 1~26,

高田晴夫,シナプシについて,左 27~44,

斎藤陽一,ツルゲーネフの『余計者の日記』とドストエフスキーの『地下室の手記』,左 45~56,

武井楨次・石田幸平,更生保護会の再社会化機能に関する基礎的研究,左 57~79,

人文科学研究第 76 輯,1989,12,

渡部和雄,西行論,1~57,
芳井研一,第一次北伐の進展と日本陸軍—張作霖爆殺事件の一前提—,59~93,
深澤助雄,三つの本質,95~125,
甘粕健・小野昭・川村浩司,新潟県岩室村観音山古墳測量調査報告,左 1~11,
伊藤豊治,ウィリアム・ゴールデング,「通過儀礼」:創造された世界,左 13~41,
大石強,派生名詞と θ 理論,左 43~60,
高木裕,『悪の華』の「私」と死のメタファー,左 61~88,
大野木哲,人間観における近代の状況,左 89~108,
佐藤康行,**Sociological Theory in Kizaemon Aruga and Lévi-Strauss' Structuralism**,左 109~126,

人文科学研究第 75 輯,1989,07,

渡部和雄,東歌の馬,1~37,
關尾史郎,トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(二)—一條記文書の古文書学的分析を中心として—,39~93,
赤澤計眞,イギリス中世封建的土地所有と新侵奪訴訟—,95~122,
石田友夫,モーパッサンの変容—『幸福』と『小紀行—ラ・ヴェルヌ僧院』から『水の上』へ—,123~145,
長塚康弘,**The current situation of traffic psychology in Japan**,左 1~36,
石郷岡泰,境界例と発達課題の問題—その2—登校拒否児を手がかりにして—,左 37~52,
向井照彦,**Cotton Mather** の世界—wilderness への使命と **jeremiad** の間—(2),左 53~73,
高田晴夫,現代フランス語における<名詞+名詞>型表現の意味構造—合成法と統辞法をめぐって—,左 75~98,

人文科学研究第 74 輯,1998,12,

深澤助雄,存在にかかわる判断について,1~24,
児玉憲明,宋書律志訳注稿(一),25~46,
關尾史郎,トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究(一)—一條記文書の古文書学的分析を中心として—,47~110,
横山伊勢雄,陳与義の詩と詩法について,111~140,
赤澤計眞,イギリス 13 世紀における侵奪占有回復訴訟と領主的土地所有,141~164,
川崎隆司,「ロシアにおける定型詩の成立過程」その三—プーシキンの生活と詩—,165~296,
石郷岡泰,境界例と発達課題の問題—その1—家族機能とも関連して—,左 1~12,
佐藤晟,T. Dreiser の **An American Tragedy** を読む,左 13~30,
向井照彦,**Cotton Mather** の世界—wilderness への使命と **jeremiad** の間—(1),左 31~52,
高木裕,ネルヴァルの詩における発話主体について(二)—「廢嫡者」**El Desdichado** の場合—,左 53~76,
高田晴夫,アルセーヌ・ダルメステールの『合成語構成概論』に見られる合成法の概念をめぐって—共時的語彙化の視点から—,左 77~96,

人文科学研究第 73 輯,1988,7,

今井道兒,文化の概念について—ノート(一)—,1~26,
川崎隆司,「ロシアにおける定型詩の成立過程」その二—古典主義からローマン主義へ—,27~79,

先田進,『禁色』と『ドリアン・グレイの肖像』,81~101,
渡部和雄,悪魔のアカデミー,103~129,
赤澤計真,権原開示制定法の成立とその政治史的背景,131~157,
高田晴夫,合成語に関する若干の考察—語彙的単位の形成とその評価について—,左 1~14,
竹中治彦・佐藤亨,罰訓練に及ぼす強化スケジュールの効果,左 15~28,
松本和良,社会学と隣接科学(VIII)—人間的条件システムのパラダイムについて—,左 29~56,

人文化学研究第 72 輯,1987,12,

山影隆,ミューズのトポス—その地誌的風景詩に於ける展開—,1~34,
赤沢計真,イングランド封建国家における特権領,35~70,
川崎隆司,ロシアにおける定型詩の成立過程—古代からロマノフまで—,71~133,
深澤助雄,スコラの抽象理論と一般概念,135~171,
内山鉄二郎,『欲望という名の電車』—ブランチの求めた生き方—,左 1~24,
向井照彦,Old Catawba の探求(III)—Thomas Wolfe の wilderness をめぐって—,左 25~47,
竹中治彦,授業評価についての一試行,左 49~65,

人文科学研究第 71 輯,1987,07,

芳井研一,華北分離工作の背景,1~28,
渡部和雄,言葉の成育,29~62,
児玉憲明,孔丘音楽論管釈,63~78,
並木宏,<授業>論ノート,79~86,
大野木哲,近代の科学と哲学—決定論的自然観をめぐって—,87~112,
深澤助雄,存在概念の析出について,113~145,
向井照彦,Old Catawba の探求(II)—Thomas Wolfe の wilderness をめぐって—,左 1~24,
松本和良,社会学と隣接科学(VII)—象徴メディアの動態過程の分析について—,左 25~48,

人文科学研究第 70 輯,1986,12,

伊狩章,森鷗外の大正期—陸軍退職前後—,1~34,
渡部和雄,パリの日本語,35~62,
山影隆,ブレイクに於ける詩女神の位相,63~84,
赤沢計真,イギリス中世地方行政と州共同体,85~108,
深澤助雄,共示詞 *nomen connotativum* と独立詞 *nomen absolutum*,109~138,
井山弘幸,「論より証拠」—科学哲学の一つの前提—,139~158,
佐藤徹郎,存在と認識,159~177,
松本和良,ルーマンの社会システム論と問題点,左 1~30,
石郷岡泰,施設における集団力学体制—その二:精神科病棟—,左 31~52,
向井照彦,Old Catawba の探求(I)—Thomas Wolfe の wilderness をめぐって—,左 53~74,
並木宏,<完了>と<受動>,左 75~82,
高田晴夫,語構成規則について—その問題点と統辞規則との比較の試み—,左 83~93,

人文科学研究第 69 輯,1986,07,

芳井研一,「満蒙」鉄道問題の展開と田中内閣,1~46,
児玉憲明,『周礼』楽律解釈史初深一鄭注の位置一,47~74,
赤沢計真,イングランド中世の国家権力と洲共同体,75~88,
石郷岡泰,施設における集団力学体制—その一—,左 1~22,
松本和良,社会学と隣接科学(VI)—方法としての4機能パラダイムについて—,左 23~52,
向井照彦,Yoknapatawha の森—Faulkner の wilderness—,左 53~75,

人文科学研究第 68 輯,1985,12,

芳井研一,「満蒙」鉄道交渉と「世論」,1~32,
渡部和雄,神の古記,33~58,
古厩忠夫,第一次大戦期上海の都市形成と労働者人口,59~91,
高田晴夫,Jean-Paul Boons の<アスペクト極理論>について,左 1~18,
並木宏,再び時称について,左 19~26,
佐藤康行,現行の沿岸漁村における漁家経営の特質と村落の変容—宮城県鳴瀬町宮戸 S 地区の事例—,左
27~60,
二宮一次,翻訳論の具体的諸問題—芝木好子の短編「白萩」と「変身」の英訳を素材に,左 61~96,
大河内康行,ゲームの行方—『帰郷』についての一解釈—,左 97~132,
大石強,前置された副詞節について,左 133~147,

人文科学研究第 67 輯,1985,07,

内山鉄二郎,逃亡する人と,しない人のド라마ー『やけたトタン屋根の上の猫』の場合,1~26,
赤沢計真,バイエルン産業資本の形成—領邦国家バイエルン産業史研究(三)—,27~40,
芳井研一,三月事件と陸軍中堅幕僚層,41~70,
佐藤誠朗,明治四年外山・愛宕事件の序論的考察,71~96,
渡部和雄,高橋たか子のカトリック,97~124,
児玉憲明,荀勗と泰始笛律—何承天との関係を論じて音響学史上の位置づけに及ぶ—,125~149,
向井照彦,Concord とその周辺—Thoreau の Wilderness—,左 1~26,
松本和良,社会学と隣接科学(V)—行為科学の諸領域と社会システムの変動について—,左 27~58,
長塚康弘,武井楨次,高校生のバイク使用および交通安全教育の基本問題に関する一検討—認知世界・自
己観に関する調査およびアクション・リサーチの結果を中心に—,左 59~107,

人文科学研究第 66 輯,1984,12,

赤沢計真,バイエルン産業資本の形成—領邦国家バイエルン産業史研究—(二),1~16,
佐藤康行,有賀社会学と構造主義—有賀の類型論の再解釈—,17~42,
倉又幸良,宇治十帖・中君物語の展開,43~70,
向井照彦,Hawthorne と Dickinson—wilderness をめぐって—,左 1~24,
並木宏,denn と weil に関する覚書,左 25~34,
松本和良,社会学と隣接科学(IV)—パターン変数図式と AGIL 図式について—,左 35~66,
長塚康弘,武井楨次,高校生のバイク問題をめぐる世論の実態と交通安全教育の方法に関する行動科学的

研究,左 67~106,

人文科学研究第 65 輯,1984,07,

渡部和雄,キリスト教の受容,1~30,

佐藤誠朗,明治四年七月二日の福岡藩処分をめぐって,31~56,

山影隆,プロメテウスの変容,57~90,

赤沢計真,バイエルン産業資本の形成—領邦国家バイエルン産業史研究—(一),91~100,

向井照彦,Natty Bumppo の生涯—J.F.Cooper の wilderness をめぐって—,左 1~26,

敦賀陽一郎,Le paradigme du second complement de verbe *matter*,左 27~60,

並木宏,時称について,左 61~71,

松本和良,<ソキエタス>と<コミュニタス>—両者の一般概念図式への関連について—,左 71~98,

武井慎次,地方都市における生活関連問題と住民の居留意識—新潟市と長岡市を事例として—,左 99~121,

人文科学研究第 64 輯,1983,12,

佐藤誠朗,明治三年日田騒擾と天皇政府,1~24,

渡部和雄,古事記の復活,25~60,

赤沢計真,資本蓄積様式の歴史的展開(五)—バイエルン産業資本の形成—,61~70,

石田友夫,ジャック・プレヴェールにおける鳥のイメージ,71~94,

長塚康弘,On the Behavior Characteristics of Accident-Prone Drivers,左 1~14,

松本和良,社会学と隣接科学(III)—行為の一般理論と行為の諸科学について—,左 15~46,

清水登,北京語第 3 声の調型に関する考察—声調体系との関連において—,左 47~62,

向井照彦,Emily Dickinson における Wilderness,左 63~88,

並木宏,命令について,89~95,

人文科学研究第 63 輯,1983,07,

深沢助雄,スポジネオ論序説,1~38,

宮崎莊平,『成尋阿闍梨母集』の特質的相貌,39~56,

佐藤亨,『玉石志林』の語彙について,57~88,

赤沢計真,資本蓄積様式の歴史的展開(四)—バイエルン産業資本の形成—,89~96,

武井慎次,因子分析よりみた新潟県内 112 市町村の地域特性,左 1~32,

松本和良,社会学と隣接科学(II)—社会学の構造的機能的理論と経験的調査について—,左 33~62,

長塚康弘,交通行動しらべ(TBI)の試作について,左 63~76,

二宮一次,アップダイクの詩集『眠れぬ夜』における諧謔と死の囁き,左 77~94,

大河内康行,愛の不実—『夏の夜の夢』論—,左 95~122,

並木宏,否定のはなし,左 123~130,

人文科学研究第 62 輯,1982,12,

赤沢計真,資本蓄積様式の歴史展開(三)—バイエルン産業資本の形成—,1~12,

芳井研一,日本ファシズムと自主的青少年団運動の展開(三)—長野県の場合—,13~40,

石田友夫, ジャック・プレヴェールの最良の詩篇, 41~64,
松本和良, 社会学と隣接科学(I)—社会科学方法論の考察—, 左 1~26,
向井照彦, アメリカ文学における **wilderness** 概念, 左 27~54,
並木宏, 話法の助動詞について, 左 55~73,

人文科学研究第 61 輯, 1982, 08,

川崎隆司, 「詩人の反乱」(一)—マンデリシュターム, 1~34,
芳井研一, 日本ファシズムと自主的 青年団運動の展開(二), 35~57,
向井照彦, 植民地時代における **Wilderness** 概念の展開, 左 1~28,

人文科学研究第 60 輯, 1982, 01,

向井照彦, **Wilderness** への接近—Washington Irving 論—, 1~28,
竹中治彦, シロネズミのオープンフィールドにおける活動性に及ぼす付加壁の効果, 29~42,
長塚康弘, 運転行動制御の条件—ドライビング・ストラテジー(運転方略)をめぐって—, 43~66,
赤沢計真, ラテン語統語論(その四), 67~81,
大野木哲, 初期ハイデガーにおける存在問題と論理学, 左 1~26,
芳井研一, 日本ファシズムと自主的 青年団運動の展開(一)—長野県の場合—, 左 27~49,

人文科学研究第 59 輯, 1981, 07,

宮崎荘平, 女房日記の源流としての「太后御記」, 1~24,
佐藤亨, 中国初期洋楽書の語彙とわが国近代漢語との関連について—『西方要紀』を中心に—, 25~56,
石田友夫訳, ギー・ド・モーパッサン年表(下)レイ・フォレスチェ編, 左 1~26,
赤沢計真, ラテン語統語論(その三), 左 27~38,

人文科学研究第 58 輯, 1980, 12,

佐藤亨, 「職方外紀」の語彙の考察—わが国近代の漢語との関連を中心に—, 1~26,
芳井研一, 普選施行前後の地方政治状況—僻村の場合—, 27~56,
内山鉄二郎, 『去年の夏突然に』における「詩人」と「医師」の出会い, 57~82,
山影隆, ブレイク『ヨブ記挿絵集』—一個の変容—, 83~108,
二宮一次, 日本文学英訳の具体的諸問題—「英語表現法」の立場から—, 左 1~28,
伊藤豊治, Mrs. Dalloway の原稿を中心に, 左 29~50,
赤沢計真, ラテン語統語論(その二), 左 51~71,

人文科学研究第 57 輯, 1980, 05,

山影隆, ヴィジョンの諸相—ウィリアム・ブレイク, 1~30,
佐藤徹郎, 恥の文化論(I), 31~50,
木村豊, 着飾った死の舞踏(II), 51~81,
向井照彦, Anne Sexton の詩(III), 左 1~30,
内山鉄二郎, 『ガラスの動物園』覚え書, 左 31~52,
佐藤晟, Herman Melville の “Cock-A-Doodle-Do!” について, 53~71,

人文科学研究第 56 輯,1979,11,

深沢助雄,数詞考,1~66,

向井照彦,Anne Sexton の詩(Ⅱ),左 1~28,

伊藤豊治,「嵐が丘」におけるキャサリンとヒースクリップの愛について,左 29~54,

赤沢計真,ラテン語統語論(その一),左 55~156,

金子一郎,Friedrich von Blanckenburgs Romantheorie,左 157~179,

人文科学研究第 55 輯,1979,03,

山影隆,「ヴィジョンの諸相」,1~46,

赤沢計真,資本蓄積様式の歴史的展開(二)—バイエルン産業資本の形成—,47~60,

向井照彦,Anne Sexton の詩(Ⅰ),左 1~28,

佐藤晟,Herman Melville の “Bartleby, the Scrivener” について,左 29~48,

並木宏,上達論について,左 49~60,

人文科学研究第 54 輯,1978,11,

深沢助雄,「一週間はなぜ七日か」,1~50,

石田友夫,モーパッサンの『詩集』,51~104,

赤沢計真,ヨーロッパ封建国家論における家父長制の概念,105~120,

大河内康行,「喜劇」と「悲劇」のはざまに—『尺には尺を』論〔2〕,左 1~24,

人文科学研究第 53 輯,1978,03,

松崎文則,詩集《悪の華》をめぐるミューズたち,左 1~16,

二宮一次,Updike の詩のおかしみ,左 17~62,

大河内康行,アンジェロとイザベラー『尺には尺を』論〔1〕—,左 63~92,

向井照彦,ディキンスンの世界—その日常性の意義—,左 92~120,

阿部健二,J. ロドリゲス『日本小文典』試訳稿(二),左 121~149,

芳井研一,田沢義鋪,左 1~28,

赤沢計真,資本蓄積様式の歴史的展開—バイエルン産業資本の形成—,29~38,

人文科学研究第 52 輯,1977,10,

赤沢計真,イングランド中世末近代初期・農民的土地市場の展開,1~38,

石田友夫,『女の一生』の創作にかかわる諸要因についての一考察,39~62,

今井道兒,ミンナ・フォン・バルンヘルムの構成—とくに,与える者と与えられる者—,63~94,

人文科学研究第 51 輯,1977,02,

赤沢計真,イングランド十三世紀・権原開示訴訟の初期的形態,1~28,

二宮一次,詩人アップダイクの挑戦とおののき—“Midpoint” 評釈(Ⅳ)—,左 1~22,

伊藤豊治,「灯台へ」におけるソネットについて,左 23~38,

大河内康行,ピンター劇の「解釈」について—『管理人』を中心として—,左 39~72,

石田友夫,ギー・ド・モーパッサン年表(上)〔ルイ・フォレスチェ編〕,左 73~94,
長塚康弘,重複作業反応検査の研究(6)—改良型の試作研究(続)—,左 95~109,

人文科学研究第 50 輯,1976,09,

伊狩章,会津八一と正岡子規・良寛,1~34,

阿部健二,活用語を承ける「ばかり」,35~68,

石田友夫,モーパッサンと中篇小説—特に『遺産』『イヴェット』『パラン氏』の場合—,69~94,

赤沢計真,プランタジネット朝中期・権原開示訴訟の初期的構造,95~118,

人文科学研究第 49 輯,1976,03,

佐藤徹郎,意味と文法—ヴィトゲンシュタイン試論—,1~18,

赤沢計真,イングランド十三世紀末期・権原開示訴訟の法的構造,19~47,

向井照彦,AN INTERPRETATION OF PURITANISM IN AMERICAN LITERATURE,左 1~24,

阿部健二,ロドリゲス『日本(大)文典』に見える誤脱改変(二)—活用表に見られる用例—,左 25~51,

人文科学研究第 48 輯,1975,11,

石田友夫,モーパッサンの作品に描かれた人間生活の幸福,1~24,

内山鉄二郎,『見えない人間』のもう一つの読み方—「私」はいかに「見えない人間」になったか—,25
~60,

二宮一次,詩人アップダイクの挑戦とおののき—“Midpoint” 評釈(Ⅲ)—,左 1~20,

大河内康行,シェイクスピア喜劇における変装の技法—『お気に召すまま』第 4 幕第 1 場を中心として—,
左 21~66,

人文科学研究第 47 輯,1975,03,

石田友夫,モーパッサンにおける普仏戦争の傷痕,1~22,

西山力也,ゲーテの老年期への第一段階—「デモーニッシュなもの」およびソネット『はげしい驚き』に
おけるその形象化を中心にして—,23~50,

中野久一,フィヒテ哲学について—時間の現象学—,51~74,

大野木哲,ハイデッガーにおける根拠律の問題,75~108,

赤沢計真,ヨーロッパ中世史研究の理論と構想—1960~74年の歴史叙述と個別研究動向—,109~138,

佐藤晟,*The Marble Faun* 小考,左 1~23,

人文科学研究第 46 輯,1974,12,

佐藤誠朗,天保弘化期の社会的変動と諸階層の対応—長岡藩を素材として—,1~26,

赤沢計真,「中世末期イングランド農民的土地所有における世襲本保所有権の形成」,27~50,

内山鉄二郎,『アメリカの息子』の問題点—出口を塞いだ「黒人」のドラマ—,51~74,

石田友夫,「モーパッサンの短編及び中篇における私生児の問題」,75~100,

阿部健二,ロドリゲス「日本(大)文典」に見える誤脱改変(1)—「大文典」の資料性をめぐって—,101~130,

長塚康弘,重複作業反応検査の研究(5)—改良型の試作結果について—,左 1~16,

人文科学第 45 輯,1973,12,

石田友夫,モーパッサンの旅行記,1~24,

佐藤誠朗,近世的利水秩序の解体過程—荘内藩大堰守制を素材に一,25~58,

杉本耕一,農民的剰余をめぐる諸階層の対立—栃尾紬の流通機構を中心に—,59~87,

伊藤豊治,There Legends in *A Passage to India*,左 1~16,

大河内康行,ハロルド・ピンターの劇的文体,左 17~56,

向井照彦,New England の elegy をめぐって,左 57~106,

佐藤晟,N. Hawthorne の “Roger Malvin’s Burial” について,左 107~132,

人文科学研究第 44 輯,1973,03,

伊狩章,会津八一の文学 その一,1~34,

石田友夫,モーパッサンの書いた二つの「ル・オルラ」,35~58,

赤沢計真,十三世紀末期ダラム司教領の構造,59~89,

二宮一次,詩人アップダイクの挑戦とおののき—“Midpoint” 評釈(Ⅱ),左 1~24,

佐藤晟,N. Hawthorne の “Young Goodman Brown” について,左 25~40,

長塚康弘,事故頻発運転者の特性に関する心理学的研究(2)—最適刺激水準尺度(SSS)得点の検討を中心として—,左 41~63,

人文科学研究第 43 輯,1972,12,

佐藤誠朗,近世在郷町騒擾の階級構造—文化 11 年栃尾町打ちこわしを中心に—,1~60,

古厩忠夫,中国における工業(手工業)の半植民地的再編過程—1910 年代の湖南省を中心に—,61~106,

杉本耕一,補助米要求と不作引をめぐる「非組織小作運動」について,107~146,

石田友夫,モーパッサンの作品に現れている恐怖と不安,147~192,

内田鉄二郎,『アンクル・トムの子供たち』にみられる黒人たちの「たたかい」と、その方向,193~227,

野本祥治,外来語としての日本語—ドイツ語の場合—,左 1~8,

二宮一次,詩人アップダイクの挑戦とおののき—“Midpoint” 評釈(Ⅰ)—,左 9~27,

人文科学研究第 42 輯,1972,01,

佐藤誠朗,特権商人をめぐる維新政府と朝敵藩,1~72,

石田友夫,モンテスキューとオランダ旅行,73~88,

渡辺綱也,文明本節用集音訓索引,89~98,

伊藤豊治,「虹」について,左 1~48,

佐藤晟,Herman Melville の *Benito Cereno* について,左 49~68,

二宮一次・伊藤豊治・William F.Marquardt,英訳 獅子文六「自由学校」(Ⅱ),左 69~110,

人文科学研究第 41 輯,1971,10,

佐藤誠朗,第二次酒田県の一考察,1~44,

渡辺綱也,文明本節用集音訓索引,45~64,

奥村紀一,ソクラテースのイデアイ論,左 1~26,

二宮一次・伊藤豊治・William F.Marquardt,英訳 獅子文六「自由学校」,左 27~93,

人文科学研究第 40 輯,1971,03,

- 中野久一,ヘルダーリン考察—時間の現象学—,1~36,
伊狩章,相馬泰三研究 I—「荊棘の路」について—,37~64,
石田友夫,モンテスキューの見たイギリス,65~82,
今井道兒,劇的な小説,83~108,
渡辺綱也,文明本節用集音訓索引,109~128,
向井照彦,Tocqueville とアメリカ文学,左 1~28,
伊藤豊治,ロレンスとハックスレー,左 29~87,

人文科学研究第 39 輯,1970,12,

- 内山鉄二郎,『シスター・キャリー』における「金」の役割,1~34,
西山力也,ゲーテ<<親和力>>序論,35~80,
石田友夫,モンテスキューの自画像,81~97,
奥村紀一,プラトーン後期対話篇の研究〔Ⅲ〕,左 1~18,

人文科学研究第 38 輯,1970,03,

- 喰代驥氏略歴 I~V
喰代驥,「思想」の存在論的分析,1~24,
伊狩章,幸田露伴と平田秃木—露伴覚え書その四—,25~50,
石田友夫,モンテスキューの嘘とルソーの真実—「孤独な散歩者の夢想」の「第四の散歩」をめぐって—,51
~66,
渡辺綱也,文明本節用集音訓索引〔2〕,67~86,
奥村紀一,プラトーン後期対話篇の研究〔Ⅱ〕,左 1~20,

人文科学研究第 37 輯,1969,08,

- 松宮周郎,精神身体医学序論(3),1~48,
石田友夫,モンテスキューのなかの異国人—「ペルシャ人の手紙」について—,49~76,
渡辺綱也,文明本節用集音訓索引,77~106,
奥村紀一,プラトーン後期対話篇の研究〔1〕,左 1~18,
伊藤豊治,「印度への道」について,左 19~50,

人文科学研究第 36 輯,1968,12,

- 松宮周郎,精神身体医学序論(二),1~12,
内山鉄二郎,H. ジェイムズの「ポイントンの掘出物」におけるアイロニー,13~45,
大河内康行,アーノルド・ウェズカー〔2〕,左 1~40,
向井照彦,植民地時代におけるアメリカの詩について,左 41~66,
郷正文,ビュヒナー「ダントンの死」について,左 67~76,
守永敏夫,ヘルダーリン—初回ホンブルグ時代前後—,左 77~102,

人文科学研究第 35 輯,1968,07,

喰代驥,素朴實在論と超越的知覚—感覺的ヒュレーの役割,1~18,
中野久一,ノヴァーリスの魔術的觀念論—時間の現象学—,19~64,
松宮周郎,精神身体医学序論(1),65~124,
伊狩章,米国における日本語と日本文学研究,125~150,
郷正文,知識人と「存在の自立」《カフカ小論》,左 1~18,
並木宏,中高ドイツ語語い調査の試み—名詞,左 19~40,
五十嵐吉信,ゲーテの「イフィゲーニエ」,左 41~55,

人文科学研究第 34 輯,1967,12,

関正郎,陶淵明の生活・思想における眞の意義について,1~74,
松宮周郎,人間関係について(5),75~104,
太田廣,「平和への勧告」を中心とするルターの思想考,105~121,
内山鉄二郎,ヘンリー・ジェイムズ『思春期』における主人公の問題,左 1~16,
磯地明雄,*The Prelude* の一面—体験と詩作と—,左 17~48,
大河内康行,アーノルド・ウエスカー [1],左 49~65,

人文科学研究第 33 輯,1967,08,

児玉彰三郎,越後縮布の流通についての一考察,1~40,
後藤均平,後漢書所見越南三郡反乱記事小考(上)—二世紀の越南—,41~67,
二宮一次・S. Goldstein,英訳 安部公房「時の崖」,左 1~16,
郷正文,保険不可能なものとはなにか ノサック ; 「わかってるわ」,左 17~40,

人文科学研究第 32 輯,1966,12,

中野久一,パスカルにおける救済の問題—時間の現象学—,1~66,
喰代驥,認識の実践的性格にふれて—認識論的研究—,67~98,
松宮周郎,人間関係について(三),99~124,
松宮周郎,人間関係について(四),125~151,
滝沢武久,子どもの運動概念の実験的研究,左 1~36,

人文科学研究第 31 輯,1966,12,

今井道児,E. R. クルティウスとフランス,1~26,
杉本正哉,ケラーの「失われた笑い」作品の「傾向」の問題を中心として,27~78,
久田竹一,Katherine Mansfield の短篇小説,左 1~22,
向井照彦,Emily Dickinson における「祈り」について,左 23~50,
斎藤保男,ブレンターノ研究—抒情詩の言葉についての一考察—,左 51~73,

人文科学研究第 30 輯,1966,01,

久田竹一,Thornton Wilder 序論—“The Long Christmas Dinner” を中心にして,左 1~24,
向井照彦,E. E. Cummings の発想,左 25~56,

金井朋和,工業英語のある連語について[1],左 57~89,

人文科学研究 29 輯,1965,09,

松宮周郎,人間関係について(二),1~26,

渡辺綱也,明応本節用集研究編,27~48,

杉本正哉,ケラーの「ディーテゲン」—作品の会社と 1870 年代の作者の姿勢についての一考察,49~78,

人文科学研究第 28 輯,1965,03,

喰代驥,“Privacy”(A.J.Ayer,1959)の問題点—分析哲学と現象学の接近—,1~30,

関正郎,郭象の莊子注にみられる自然その他,31~72,

児玉彰三郎,幕末・明治初年の武蔵国における地主経営—埼玉県比企郡の二村の例—,73~140,

人文科学研究第 27 輯,1965,01,

野村彰,フランツ・ヴェルフエルのための覚書(三)—承前—,1~20,

渡辺綱也,明応本節用集仮名索引(六),21~42,

大河内康行,『ジョン・オズボーン』—現代英国演劇研究[1],左 1~30,

久田竹一,『欲望という名の電車』について,左 31~68,

人文科学研究第 26 輯,1964,03,

伊狩章,柳亭種彦の読本,1~34,

児玉彰三郎,堀家文書,35~84,

内山鉄二郎,『カサマシマ公爵夫人』における政治的意図について,85~116,

滝沢武久,子どものイメージの実験的研究—変化のイメージを中心として—,左 1~18,

佐藤晟,イエイツ:存在統一と葛藤,左 19~37,

人文科学研究第 25 輯,1963,12,

喰代驥,ロックの悟性論における素朴实在論的予断の分析(一)—ヒストリカル・プレイン・メソッドの背景—,1~22,

渡辺綱也,明応本節用集仮名索引(四),23~44,

五十嵐彰,フランツ・ヴェルフエルのための覚書(二)—承前—,45~67,

伊藤豊治,“All the King's Men”における Willie Stark の臨終の言葉を中心に,左 1~20,

久田竹一,『セールスマンの死』について,左 21~40,

人文科学研究第 24 輯,1963,03,

松宮周郎,人間関係について(一),1~16,

喰代驥,ロックの悟性論にみられる現象学的方法,17~38,

渡辺綱也,明応本節用集仮名索引(三),39~66,

中島明彦,ゲーテのイフィゲーニエ—危機を克服するときのオフィゲーニエの態度—,67~79,

二宮一次,エミリ・ディキンソンの肖像—その書簡から—,左 1~15,

人文科学研究第 23 輯 1963,02,

- 伊狩章,大正中期の批評方法論争—有島論を中心として—,1~30,
渡辺綱也,明応本節用集仮名索引(Ⅲ),31~60,
長谷川洋,ベニスに死す—マンに於ける芸術家の形式意志と死の問題—,61~74,
五十嵐彰,フランツ・ヴェルフェルツのための覚書(1),75~92,
篠田成之,Howards End の寓意と構成,左 1~20,
久田竹一,『トロイラスとクレシダ』—考察,左 21~40,
久保尋二,“Adorazione dei Magi” 図考〔I〕,左 41~56,

人文科学研究第 22 輯,1962,03,

- 伊狩章,大正期文学論争の研究(Ⅱ)「印象批評論争」,1~20,
山田英雄,奈良時代における上日と禄,21~50,
松宮周郎,日本的労使関係の問題点,51~76,
五十嵐吉信,ゲーテ「ヴェルテル」考—シュトルム・ウント・ドラング克服の過程として—,77~92,
斎藤保男,ノヴァーリスの詩構想(二),93~104,
内山鉄二郎,グレアム・グリーンへのヘンリ・ジェイムズ小説論(一)—作中人物のリアリテ—,105~120,

人文科学研究第 21 輯,1961,12,

- 渡辺綱也,明応本節用集仮名索引(Ⅱ),1~30,
杉本正哉,「グライフェン湖の代官」(承前) **Gottfried Keller** の範例的人間像の問題を中心として,31~40,
篠田成之,“The Longest Journey” —E. M. Forester の小説中に於るその地位,左 1~20,
大河内康行,怒りの姿勢—「怒れる若者たち」研究—,左 21~52,
成田英夫,前置詞の研究—vor と für(1),左 53~69,

人文科学研究第 20 輯,1961,03,

- 中野久一,ニーチェの永劫回帰(Ⅱ)—時間の現象学—,1~26,
松宮周郎,日本的労使関係の特殊性,27~54,
永井行蔵,横河物語考,55~82,
渡辺綱也,明応本節用集仮名索引,83~110,
佐藤晟,イェーツの詩のプラトニックシムボルについて,左 1~12,
立間実,ホプキングのソネット研究,13~29,

人文科学研究第 19 輯,1960,11,

- 中野久一,ニーチェの永劫回帰(Ⅰ)—時間の現象学—,1~26,
松宮周郎,暴力,27~58,
二宮一次,アメリカのフォークナァ研究(1)—『八月にはかるい』のリーナを中心として—,59~84,
斎藤保男,ノヴァーリス詩構想(一),85~108,
杉本正哉,「グライフェン湖の代官」 **Gottfried Keller** の範例的人間像の問題を中心として,109~124,
内山鉄二郎,H・ジェイムズの『鳩の翼』—その倫理,政治および美学,左 1~16,

孫野義夫, 未来系におけるムード—動詞論(Ⅲ), 左 17~29,

人文科学研究第 18 輯, 1960, 03,

喰代驥, 問題概念としての感覚(Ⅲb), 1~32,

伊狩章, 大正期文学論争の研究—有島武郎「平凡人の手紙」をめぐって—, 33~56,

藤田正太郎, 近古語彙の研究(三)—体源抄の語彙—, 57~82,

成田英夫, ドイツ語接続詞に関する覚書, 左 1~14,

野本祥治, ドイツ語俚諺考, 左 15~54,

人文科学研究第 17 輯, 1959, 12,

喰代驥, 問題概念としての感覚(Ⅲa), 1~22,

伏見寿像, 俳人汗虹の研究—越後における美濃派俳諧—, 23~48,

藤田正太郎, 近古語彙の研究(二)—続教訓抄の語彙—, 49~84,

内山鉄二郎, アウトサイダーのドラマー『ある婦人の肖像』研究, 85~108,

立間実, 英詩におけるスプリングリズム其の性質の発達(第三部), 左 1~32,

孫野義夫, フランス語同士組織の成立—動詞論(Ⅱ)—, 左 33~51,

人文科学研究第 16 輯, 1959, 03,

渡辺綱也・藤田正太郎, 近古語彙の研究(一)—教訓抄の語彙—, 1~36,

立間実, ヘラクリタスの火, 左 1~14,

大河内康行, 「ウィリヤム M. サッカレ」—人間の研究, 左 15~84,

人文科学研究第 15 輯, 1959, 01,

喰代驥, 問題概念としての感覚(Ⅱ), 1~70,

石井靖夫, クライストの小説の形式に就いて—「O 侯爵夫人」と「コールハース」—, 71~94,

内山鉄二郎, ヘンリ・ジェイムズの『アメリカ人』—危機の状況—, 95~115,

人文科学研究第 14 輯, 1958, 03,

喰代驥, 問題概念としての感覚(Ⅰ), 1~50,

箕輪真澄, 近松研究史覚書, 51~70,

斉藤保男, 「カロッサ・成年の秘密」考, 71~100,

斉藤一弥, 唯物史観の論理(続), 101~138,

五十嵐正一, 升堂法と積分法—その実情と不振の原因について—, 139~159,

石井靖夫, 独逸語の音響象徴(Lautsymbolik)に就いて, 左 1~20,

人文科学研究第 13 輯, 1957, 12,

喰代驥, 存在が自らを経験的に限定する二つの様相, 1~70,

小口登久治, ニイチェにおける自己の問題, 71~82,

佐藤一弥, 唯物史観の論理, 83~105,

立間実, 英詩に於けるスプリングリズム 其の性質と発達(第二部), 左 1~26,

人文科学研究第 12 輯,1957,03,

中野久一,悲劇における倫理的なもの—時間の現象学—,1~62,

二宮一次,フォークナアの技法—『アブサロム・アブサロム!』の場合—,63~118,

立間実,The Windhover の研究—G. M. Hopkins の Sonnet 観—,左 1~21,

人文科学研究第 11 輯,1956,11,

喰代驥,フッセルにおける歴史的現実の見方について,1~38,

関正朗,劉劭の人物志について,39~74,

五十嵐正一,明代における国子生の生活について,75~98,

押見虎三二,萬葉集の展開史的研究—その序論—,99~118,

小山郁之進,ボンペンシェーレによる「観念運動学」の研究〔II〕—それへのオールダス・ハックスリの
関心,左 1~30,

人文科学研究第 10 輯,1956,03,

松宮周朗,行動と環境,1~18,

五十嵐正一,明代撥歴制度考,19~40,

中島勝,フリードリッヒ・ヘッベルの世界観,41~82,

横尾定理,ジョン・ダン評釈,左 1~24,

立間実,英詩に於けるスプラングリズム其の性質と発達(第一部),左 25~52,

人文科学研究第 9 輯,1955,12,

喰代驥,哲学的視点形成の基礎,1~40,

中野久一,ファウストにおける悪の問題,41~82,

箕輪真澄,近松はいかに読まれてきたか,83~98,

小山郁之進,ボンペンシェーレによる「観念運動学」の研究,99~123,

人文科学研究第 8 輯,1955,03,

大塚恵一,カントに於ける美の位置と意義,1~26,

野田健一,シラーの「芸術家」,27~42,

守永敏夫,ヘルダリン覚書,43~56,

小口登久治,ニイチェの「悲劇の誕生」にあらわれた「ソクラテス的なもの」と「ディオニュソス的なもの」,57~76,

松崎文則,背徳者について,77~87,

立間実,無韻詩の律動美と変化に就いての研究,左 1~36,

人文科学研究第 7 輯,1954,07,

中野久一,時の美的形成,1~44,

森谷秀亮,五十嵐文庫及び高橋文庫について,45~88,

二宮一次,ヴァージニア・ウルフの人間像,左 1~42,

伊藤豊治,オルダス・ハックスリー,左 43~60,
小川美彦,James Joyce の<Exile>研究,左 61~109,

人文科学研究第 6 輯,1954,03,
松宮周郎,条件反射と条件づけ,1~22,
大塚恵一,判断力批判に於ける超感性的なるもの,23~46,
渡辺綱也,越後東蒲原郡方言の研究 中間報告(1),47~70,
増谷外世嗣,W. B. Yeats 以後,左 1~61,

人文科学研究第 5 輯,1953,10,
山田英雄,鎌倉時代における時代区分観,1~30,
二宮一次,ヴァージニア・ウルフ:意識小説の二、三の様相,31~66,
立間実,英詩律動論,67~98,
中島勝,文学作品の評価について,99~126,
石井靖夫,グリムへの道,127~166,

人文科学研究第 4 輯,1952,12,
森谷秀亮,大政奉還と将軍職の辞退(下),1~18,
竹内公基,クリストファー・マーロウ,19~42,
伊藤豊治,オルダス・ハックスリー,43~60,
松崎文則,詩人と社会—ボードレールの場合—,61~76,
成田英夫,ゲーテ『ローマ哀詩』の成立に関して,77~94,
高本研一,「ユーパリオスとオルフオイス」覚書,95~117,

人文科学第 3 輯,1952,07,
松宮周郎,具体性の原理と同時性の原理,1~24,
鈴木茂男,先験的感性論,25~50,
柳本実,荀子における性と心,51~70,
石井靖夫,浪漫派の文学理論の一考察,71~100,
二宮一次,V. ウルフの方法,左 1~22,
横尾定理,コングリーヴの喜劇,左 23~50,

人文科学研究第 2 輯,1951,12,
森谷秀亮,大政奉還と将軍職の辞退(上),1~18,
箕輪真澄,近松様式発展試論,19~44,
野田健一,シラーの「ドン・カルロス」,45~68,
竹内公基,ジョン・ウエブスター,左 1~30,
増谷外世嗣,ラムの問題,左 31~48,

人文科学研究第 1 輯,1951,07,

関正郎,中庸の論理,1~28,

巢山菊二,「態度」の研究について,29~50,

松宮周郎,物理的世界と生物的世界と心理的世界の間,51~76,

太田廣,ルターの思想と限界,77~92,

斉藤省三,トオマス・マンの辿れる道,93~102,